

I-2 白幡論理基礎

(1) 研究仮説

- ①ディベートの実践方法を学ぶことを通して、英語運用における論理的思考の獲得が期待でき、ディベートを経験することで情報収集能力やグループでの協働といった社会的能力を向上させることができるであろう。
- ②BYODを活用し、オンラインで外部の人間と英会話を行うことで、英語使用に対する積極性や英語表現力の幅を広げることができるであろう。

(2) 実践

- ア 実施日時：① 令和3年4月 ～ 10月（第1期） 令和4年2月 ～ 3月（第2期）
 ② 令和3年11月 ～ 令和4年1月
- イ 実施場所：各教室、会議室、白幡会館および各家庭
- ウ 参加生徒：高校1学年 239名
- エ 実施内容：①－1 show & tell
 －2 Persuasive Speech
 －3 Brainstorming
 －4 Refutation
 －5 Mini Debate
- ②：外部業者のオンライン英会話を行う。
実施後（前）の時間を使い、その日に学んだ単語や表現、使用した情報等を英語で共有し、発表する。（ペア、グループ、クラス）

(3) 評価

ア 生徒アンケートより

1. ディベートの学習を通じて、相手を納得させる方法について学ぶことができた。

・ 思う。	62.3%
・ 思わない。	31.8%
・ 分からない。	5.0%
 2. ディベート活動を通じて、相手の説得に必要な情報等について、グループ（ペア）で話し合うことができた。

・ 思う。	73.6%
・ 思わない。	25.0%
・ 分からない。	1.4%
 3. オンライン英会話を経験したことで、以前よりも英会話に抵抗が少なくなった。

・ 思う。	74.1%
・ 思わない。	17.7%
・ 分からない。	8.2%
 4. 年度当初と比べ、英語の表現の幅が広がった。

・ 思う。	70.9%
・ 思わない。	24.1%
・ 分からない。	5.0%
- イ 参加生徒の感想（一部抜粋）
- ・ 英語でのディベートはとてもためになった。相手に自分の思いを伝えられるようになってきているのを感じた。
 - ・ 楽しく英会話をすることができた。

- ・オンライン英会話を行ったことで英会話をするに対する恐怖心が少なくなった。
- ・英会話は、英作文を書いたり、問題を解いたりする時とは違ってその場で考えてその場で話さないといけないので普段の演習以上に自分の英語力（単語力、文法の習得具合）の定着度が分かりました。
- ・はじめはすごく緊張したが回数を重ねるうちにとても楽しくなって家の人と話したところ、これからも続行することになった。いい機会をいただけてすごくうれしかったです。
- ・外国の方と英語で会話をする機会が今までなかったので、すごくありがたいいい経験になりました。完璧な英語じゃなくても何か話せば伝わるができるのだとわかりました。
- ・はじめは、発音などの指摘に対して恐怖していましたが、回を重ねるにつれて、抵抗力がなくなり、発音や表現の幅が広がった。
- ・たった数回の会話で自分の英語における表現力が向上したのを感じた。だが、自分の性格的に見知らぬ人と会話するのは正直きつかった。
- ・先生の当たり外れがかなり多い。
- ・通信環境が悪くて、音声が途切れたり、フリーズしたりしてやりにくかった。講師の先生がイライラしたときもあった。
- ・三回目くらいから飽きてきた。
- ・オンライン英会話で、自分が言いたいことが言えないときの悔しさを一層感じることもできた。数を重ねていくうちに、いうことがテンプレ化してきてしまっていたのもっと英語の表現を増やしたい。

ウ 考察

この授業では、ALT とのチーム・ティーチングによりディベートの基礎訓練とオンラインによる英会話レッスンの補助を行い、上記仮説の検証を行った。

仮説①の「英語運用における論理的思考の獲得」については、アンケート結果では「そう思う」と答えた生徒は 63.2% となり、4 割弱の生徒が否定的であることから、これらの生徒にも実感してもらえるよう、今後の授業についてさらなる改善が必要と考える。ディベート活動前のペアでの意見交換については 73.6% の生徒が「協力できた」と回答していることから、「社会的能力の向上」については概ね仮説を支持する結果となった。簡易ディベート演習で勝敗を決めることは、相手チームを説得するという各チームのモチベーションにつながり、その準備としての話し合いや意見交換が有意義に行うことができたのではないかと考える。このことは、授業観察において、簡易ディベートやその前の話し合い活動時の声量が、授業の回を重ねる毎に大きくなったことから実感できる。

また、仮説②については自由記述によるアンケート結果から、どちらの仮説についても多くの生徒が肯定的な意見を示す一方で、本人の性格や考え方によって効果の実感に差があることも分かった。「英会話に対する抵抗感」については 74.1% の生徒が、実施前と比べて「減少した」と回答した。英会話に対する抵抗の減少は、生徒が英語で自己表現をする上で重要であり、本校の教育目標の一つである「グローバル人材の育成」にも寄与するものであると考える。「英語の表現の幅」については肯定的に回答した生徒は 70.9% に留まった。否定的な意見としては、定型表現の繰り返しになってしまい、最後まで新しい表現を開拓するには至らなかったというものもあり、授業後のフィードバックを工夫しなければならないと考える。

ウ 今後の課題

仮説①については、第 1 期ではディベートの基礎のみの指導であったため、基礎以外の部分についても継続して指導を行い、実際の形式でのディベートにも取り組むことで、英語における論理的思考や相手を説得する方法についてより深く学ぶことができると考える。

仮説②については、オンライン英会話をより効率的に活用するために、実施前の導入や実施後のフィードバックについて、もっと効果的な在り方を考えていくと同時に、オンライン英会話で学んだ内容が他の英語の授業にもうまく活用できるよう、生徒への指導や声掛け等を考える必要がある。また、アンケート結果にもあった通り、回線の不具合やバッテリーの消耗の心配等、ハード面においてもより一層の改善が必要であると考えられる。